

社会教育主事コースにおける地域と連携した 実践力育成の試み

山本 珠美

(生涯学習教育研究センター)

760-8521 高松市幸町 1-1 香川大学生涯学習教育研究センター

Training Practical Faculty in Cooperation with Local Educational Resources at Social Education Director Course

Tamami Yamamoto

Education and Research Center for Lifelong Learning, Kagawa University,

1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8521

要 旨 香川大学教育学部社会教育主事コースにおいて、教育委員会・社会教育施設と連携し、実践力育成のための授業に取り組んでいる。調査によると社会教育主事には「学習課題の把握と企画立案能力」が重視されているため、授業では学習プログラムの体験、立案、実施および調査を行っている。実践力は、プレッシャーのかかる「本物体験」を積み重ねること、その体験に真剣に取り組むことで得られると思われる。

キーワード 社会教育主事 実践力 学習プログラム

はじめに

本稿は、香川大学教育学部に開設されている社会教育主事コースにおいて、過去10年にわたって筆者が試みてきた地域と連携した実践力育成の取組について報告するものである。

社会教育主事は、社会教育法に基づき都道府県・市町村教育委員会事務局に置かれる社会教育に関する専門的職員であり、社会教育行政の企画・実施および専門的技術的な助言と指導に当たることを通して、人々の自発的な学習活動を援助する役割を果たしている。

社会教育主事は、社会教育主事講習等規程に基づき、大学の正課教育課程または大学等で実

施される社会教育主事講習によって養成されているが、社会教育審議会成人教育分科会「社会教育主事の養成について（報告）」(1986年)や生涯学習審議会社会教育分科審議会「社会教育主事、学芸員及び司書の養成、研修等の改善方策について」(1996年)等において、実践的な能力を育成するため演習・実習等をできるだけ取り入れることと述べられている。あわせて、その円滑な実施のためには、大学側が社会教育施設等の積極的な協力を求めることが必要であると指摘されている。

筆者は同コースを担当するにあたって、香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課（以下、香川県教委生涯学習・文化財課と略記）をはじ

め、岡山県生涯学習センター振興課、徳島県立総合教育センター生涯学習課、香川県内市町教育委員会および社会教育施設等にご協力いただき、担当する全科目で実践的内容を含む授業を行っている。その成果と課題を検討することが本稿の目的である。

I. 社会教育主事に求められる実践力

社会教育主事資格を大学在学中に取得するためには、社会教育法第九条の四の三号にあるとおり「大学に2年以上在学して62単位以上修得し、かつ、大学において文部科学省令で定める社会教育に関する科目の単位を修得」することが必須である（かつ、同条一号に定める職務経験1年以上も必要である）。

「文部科学省令で定める社会教育に関する科目の単位」は、社会教育主事講習等規程第三章「社会教育に関する科目の単位」で定められ

ており、①生涯学習概論（4単位）、②社会教育計画（4単位）、③社会教育演習、社会教育実習又は社会教育課題研究のうち一以上の科目（4単位）、④社会教育特講（12単位）となっている。香川大学教育学部における科目開設状況は表1のとおりである。

近年、筆者はこれらの科目のうち、生涯学習概論Ⅱ（①の2単位）、生涯学習計画論A（②の2単位）、社会教育課題研究Ⅱ（③の2単位）、社会教育特講ⅡA（④の2単位）、計4科目8単位を担当している。そして、実践力育成を一つの目標に掲げ、その全ての科目において、程度の差はあるものの、実践的内容を含む授業を行っている。おおよその履修学生数は、生涯学習概論Ⅱと生涯学習計画論Aが20名程度、社会教育課題研究Ⅱが2～10名程度、社会教育特講ⅡAが10名程度であり、大人数講義ではないため実践を取り入れやすい。

それぞれの科目の取組について紹介する前

表1. 香川大学教育学部における社会教育主事コースの科目開設状況

区分	必要単位数	授業科目	単位	備考
生涯学習概論	4 単位	生涯学習概論Ⅰ	2	
		生涯学習概論Ⅱ★	2	
社会教育計画	4 単位	生涯学習計画A★	2	
		生涯学習計画論B	2	
社会教育演習 社会教育実習 社会教育課題研究	選択必修 4 単位	教育環境デザイン演習Ⅰ	2	人間発達環境課程（人間環境教育コース）
		教育環境デザイン演習Ⅱ	2	人間発達環境課程（人間環境教育コース）
		教育調査法演習	2	隔年開講（2014年度休講）
		社会教育課題研究Ⅰ	2	隔年開講（2014年度開講）
		社会教育課題研究Ⅱ★	2	
		教育学演習ⅡA	1	学校教育教員養成課程（学校教育基礎コース）
		教育学演習ⅡB	1	学校教育教員養成課程（学校教育基礎コース）
社会教育特講Ⅰ	12単位	社会教育特講ⅠA	2	
		社会教育特講ⅠB	2	「教育社会学」を読み替える
社会教育特講Ⅱ		社会教育特講ⅡA★	2	
		社会教育特講ⅡB	2	「教育経営学」を読み替える
社会教育特講Ⅲ		ボランティア活動論	2	2014年度は休講
		メディア論	2	
		家族・社会システム論	2	
		同和教育	2	2014年度は休講
		人間形成論	2	
		道德教育論	2	

注）授業科目末尾に★がついている科目が筆者の担当。

に、社会教育主事に求められる実践力とは何か、筆者がそれらの中で特にどの点を重視して授業を構成しているか、確認しておきたい。

先に挙げた社会教育審議会成人教育分科会「社会教育主事の養成について(報告)」(1986年)では、社会教育主事に求められる資質・能力として、①学習課題の把握と企画立案の能力、②コミュニケーションの能力、③組織化援助の能力、④調整者としての能力、⑤幅広い視野と探求心をあげている。報告から30年弱が経過しているが、現在、現職の社会教育主事自身はどのような資質・能力が必要と感じているだろうか。そして、スキルアップのためにはどのような学習が必要であると考えているだろうか。

社会教育主事を対象とする(あるいは社会教育主事に関する)質問紙調査は、国立教育政策研究所社会教育実践研究センターが数年おきに実施している。『社会教育主事の教育的実践力に関する調査研究』(2002年3月)は社会教育主事本人に対する質問紙調査であるが、今の職務を遂行する上で特に必要と考える能力(資質)という質問に対し、「学習課題の把握と企画立案能力」がもっとも多く63%、次いで「コミュニケーション能力」(54%)、「幅広い視野と探

求心」(49%)であった。そして現在学習したい内容については「学習プログラムの立案に関すること」(40%)、「様々な学習手法に関すること」(40%)、「生涯学習計画・社会教育計画に関すること」(36%)であった。

『社会教育主事の職務等に関する実態調査報告書』(2006年4月)は、都道府県(以下、県)・市町村(以下、市)教育委員会調査と社会教育主事調査からなる。教育委員会調査によれば、社会教育主事が職務を遂行する上で必要と考える能力(資質)は、「学習課題の把握と企画立案能力」(県83%、市79%)、「調整者(コーディネーター)としての能力」(県74%、市56%)、「コミュニケーション能力」(県36%、市34%)が上位3項目である。社会教育主事調査においても、順番は変わるものの、上位3項目は変わらない(「調整者(コーディネーター)としての能力」59%、「学習課題の把握と企画立案能力」54%、「コミュニケーション能力」50%の順)。また、教育委員会調査において、社会教育主事が研修で学習をする必要があると考える内容は、県が「生涯学習・社会教育に関する先進的实践事例」(60%)、「生涯学習推進計画・社会教育計画の立案の技術」(51%)、「学習プ

表2. 社会教育主事コース(筆者担当科目)における実践力育成の取組

科目名	時期と単位	実践的内容	実践に係る経費	実践レベル
生涯学習概論Ⅱ	後期 2単位	〔学習プログラムの体験〕 香川県教育委員会生涯学習・文化財課主催「さぬKids かるた大会」(毎年2月中旬開催)のボランティア運営スタッフとして参加する。	かるた大会実施に係る経費は主催者(県教委)の負担。	☆☆☆☆★
生涯学習計画論A	前期 2単位	〔学習プログラムの立案〕 『第3次岡山県生涯学習推進基本計画』に基づく学習プログラムを考案し、岡山県生涯学習センターにて発表、センター職員の評判を受ける(徳島県立総合教育センターマナビセンター施設見学もあり)。	岡山県・徳島県の見学旅費は「地域社会連携型フィールドワーク科目拡充支援事業」による経費の支援あり(2012年度～現在)。	☆☆☆☆★
社会教育課題研究Ⅱ	前期 2単位	〔学習プログラムの実施〕 小学生対象の講座(生涯学習教育研究センター主催公開セミナー)を企画し、夏休み期間中に香川県各地で開催する。	公開セミナーに係る経費(材料費、会場までの交通費)は生涯学習教育研究センターの負担。	☆☆★★★★
社会教育特講ⅡA	後期 2単位	〔学習プログラムの調査、コミュニケーション能力の育成〕 社会教育に関連するテーマを毎年決め、そのテーマに基づくラジオ番組を制作し、FM高松で放送する。	取材に係る経費(主に取材先への交通費)は学生負担、FM高松の電波使用料は教員負担(2007年度のみ現代GPによる経費の支援あり)。	☆☆★★★★

注) 実践レベルの★の見方: 15回の授業の3回分を星一つとし、☆は非実践的内容、★は実践的内容をあらわしている。★一つであれば、15回中3回程度が実践的内容である。

ログラムの立案」(45%)、市が「生涯学習推進計画・社会教育計画の立案の技術」(58%)、「学習プログラムの立案」(49%)、「生涯学習・社会教育に関する知識(概論)」(38%)の3つをそれぞれ上位にあげている。社会教育主事自身が学習したい内容については、「生涯学習・社会教育に関する先進的実践事例」(47%)、「学習プログラムの立案の技術」(31%)、「ワークショップ運営の技術」(29%)が上位3つとなっている。

『社会教育主事の専門性を高めるための研修プログラムの開発に関する調査研究報告書』(2009年3月)は県および市教育委員会に対する調査であるが、社会教育主事が職務上必要とする資質能力としては、「学習課題の把握と企画立案能力」(県87.2%、市74.7%)、「調整者(コーディネーター)としての能力」(県80.9%、市65.4%)、「コミュニケーション能力」(県40.4%、市36.7%)が上位3項目となっており、2006年4月の調査結果と同じ順となっている。

以上、3つの調査研究を見てきたが、資質・能力として「学習課題の把握と企画立案能力」を挙げる割合がいずれも非常に高くなっており、連動して、学習したい内容にも「学習プログラムの立案」が多い。そこで、筆者が授業計画を作成するに際し、「学習課題の把握と企画立案能力」という資質・能力を実践力として重視し、その資質・能力向上のために「学習プログラムの立案」を様々な角度から取り上げることとした(表2参照)。

以下の章では、それぞれの科目の取組について、順に説明する。

Ⅱ. 学習プログラムの体験—生涯学習概論Ⅱ—

「生涯学習概論」(4単位)は、生涯学習および社会教育の本質について、また、学習者の特性や教育相互の連携について理解を図ることを目的とする科目である。

筆者が担当する生涯学習概論Ⅱは、概論という科目の性質を考慮し、基本的には教科書¹⁾を

使用しつつ、生涯学習の意義や関連施策の動向などについて基本理解を促すことを主目的としている。しかし、単に教科書で理論を学ぶだけでは面白味に欠ける。理論と同時に現実を学ぶこと、および現職の生きた言葉を聞くために、2006年度より香川県教委生涯学習・文化財課の社会教育主事の方に県教委の施策について説明していただくという取組をはじめた。

県教委の社会教育主事をお願いした経緯は次のとおりである。筆者の所属する香川大学生涯学習教育研究センターと県教委との間で結ばれた協定により、当センター専任教員(センター長と筆者)は交代で毎週水曜日午後、生涯学習政策アドバイザーとして生涯学習・文化財課に派遣され、県および市町の担当者からの相談に応じている。その中で関係構築ができており、授業への協力依頼は容易であった。

その後2010年度に、同課は新規主催事業として「早寝早起き朝ごはん 元気いっぱい さぬ kidsかるた大会」をはじめることとなった。同課では、同年、生活習慣向上のためのオリジナルのかるたを制作した。標語(読み札)は県内在住の保育所・幼稚園の幼児、小学生、中学生から募集し採用したものであり、例えば「あ朝ごはん 頭と体の 目覚まし時計」「ら 乱暴な 言葉は友達 傷つける」など、お手伝いやあいさつなど、子どもたちに身につけてほしい生活習慣が表現されている。かるた大会は、小学生が楽しみながら「早寝早起き朝ごはん」「家庭学習や読書」「外遊びや運動」などの生活習慣の大切さについて意識を高めるとともに、望ましい生活習慣づくりを実践する契機となること、かるた大会を通して社会生活に必要な礼儀や集中力等を育成すること²⁾という趣旨で行われるものである。同事業の実施にあたり、香川大学の学生にボランティアの運営スタッフとして協力いただけないか、という相談を受けた。実際に行われている学習プログラムを学習機会の提供側の立場で体験する良い機会であると考え、二つ返事でお引き受けした。

かるた大会は毎年2月中旬の土曜日午前中に玉藻公園披雲閣で開催され、約200名の小学生

が参加している。大学生は、前日の会場設営にはじまり、当日は受付、案内・誘導、読み手、審判、記録、表彰式など、ほぼ全ての役割を担う。役割分担は主担当の社会教育主事と筆者との話し合いにより決定し、学生は社会教育主事の指示および同課作成のマニュアルに従って行動することとなる。生涯学習概論Ⅱの授業15回のうち、大学での事前説明会、前日の会場設営・リハーサル、本番、それぞれに1回分、計3回をこの取組にあてている。

ここで、大会終了後の学生の「振り返り」(2012年度、2013年度)をいくつか紹介する。

- ・遊びを通して学ぶこと、それは子どもが一番身につけやすい学び方であるから、重要なことであるほどそのように体で覚えられる機会を得られることが大切であると感じた。
- ・時間になっても会場にこない子どもたちに対して電話をするという対応や、低学年の子どもたちには細かいところまで指示をだす配慮をしているところなど、企画側の様子を見ることができ、今回ボランティアという立場で参加できてよかったと思う。
- ・こういったイベントにスタッフとして参加していくために求められるのは、予期せぬトラブルへの対応をいかにするべきかである、と思った。ゼッケン代わりのネームプレートを壊してしまった子供がいたり、また参加する選手の兄弟が、カルタ大会の会場とは別の部屋で見あきたのか試合中に大きな声で走りま



図1. かるた大会 (2010年度)

わったりなどのハプニングを見かけた。そういった時の教育委員会の運営スタッフの方々の対応の仕方は落ち着き慣れていた。今回は教育委員会のボランティアスタッフとして参加したが、自分が主催する側になった時にどういう風に対応すればいいか非常に参考になった。

その他にも、このような大会に熱心に参加する家庭とそうでない家庭があることへ想像を膨らませ、「カルタに熱心に取り組む子どもや理解ある保護者を持つ家族とそうではない家族を見極め、それぞれの家族に対して対策を練っていくための手段としてカルタを見ていくことも大切なのだろうと思った。」という、生涯学習の場の「周辺の学習者」「無関心層」に対し自治体がどうアプローチするべきか、という問題提起をした学生もいる。

なお、ここでの目的は学習プログラムを提供側として体験するということである。プログラム設計の段階から参加しているわけではないため、学生は「指示されたことをする」だけに過ぎないが、かるた大会終了後の学生の意見は次年度にいかされるようになっている。

Ⅲ. 学習プログラムの立案—生涯学習計画論A—

「社会教育計画」(4単位)は、社会教育の計画・立案についての理論と方法の理解を図ることを目的とする科目である。

筆者が担当する生涯学習計画論Aでは、15回の授業を「理論編」(8～9回分)と「実践編」(6～7回分)に分けている。理論編は講義型であり、教科書³⁾を用いて基礎的な知識の理解を促し、一方、実践編はグループワーク中心で、『第3次岡山県生涯学習推進基本計画』(以下『第3次計画』)を取り上げ、同計画を実行に移すための具体策である学習プログラムの立案をしている。作成した学習プログラムは岡山県生涯学習センターを訪問して職員の前でプレゼンテーションを行い、批評を受ける。

岡山県を事例として取り上げた理由は、①香川県は単独では社会教育計画を作成していないこと（香川県教育基本計画に含まれる）、②本学の学生は香川県に次いで岡山県出身者が多く、通っている学生も少なくないこと、③筆者は岡山県生涯学習審議会の委員であり『第3次計画』に詳しいこと、④岡山県生涯学習センターの社会教育主事（当時）は香川大学で実施された社会教育主事講習を受講しており、筆者と信頼関係ができていたこと、が挙げられる。なお、2012年度からは、岡山県に加え徳島県立総合教育センター（マナビィセンター）も訪問し、生涯学習課の事業説明や施設見学を行っている（同課の社会教育主事も香川大学での社会教育主事講習の受講者である）。岡山県・徳島県とも、訪問にかかる交通費については、地域社会連携型フィールドワーク科目拡充支援事業による経費の支援によりまかなっている（学生個人負担なし）。

授業のうち「実践編」の進め方は次のとおりである。5月中旬にまず徳島県立総合教育センターを訪問し、県立の生涯学習センターの役割を学ぶ。この時の主目的は、社会教育主事から事業説明を受けること、施設見学を行うことである。訪問前にセンターHPを見て考えた質問に応答する時間も設けている（質問は事前にセンターに送付）。

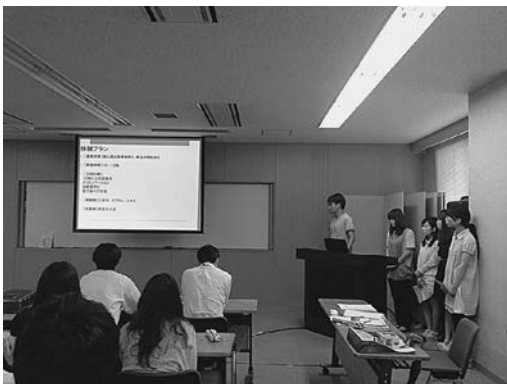
続いて7月中旬の岡山県生涯学習センター訪問へ向けての学習となる。4～5名のグループを作り、グループ内で分担して『第3次計画』を輪読する。その後、『第3次計画』の中で最も関心を持った項目について（例えば「地域に対する理解を深める学習機会の充実」「地域社会に参加・参画するプログラムの充実」）、その実現を促す学習プログラムを立案する。学習プログラム立案にあたっては、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『社会教育計画策定ハンドブック（計画と評価の実際）』に掲載されたフォーマット（計画シート6、p.93）を用いて、できるだけ現職の社会教育主事の研修に近いものとなるよう工夫している。センター訪問時は、審査員となるセンター職員4名の前

で、パワーポイントを使用しつつ10分間のプレゼンテーションを行っている。

審査の評価は次の10項目について行う。各項目2点満点（良い2点、まあまあ1点、悪い0点）で、合計20点満点となる（この評価点は最終成績に反映される）。

発表の態度について（5項目）

- ①発表に熱意を感じられたか。
- ②10分間を上手に使えていたか。



(1) 事業名	わくわく三世代交流！
(2) 事業の目的	体験学習を通じて地域の高齢者と触れ合う
(3) 実施主体	公民館（岡山県立）
(4) 対象者・定員	小学生の親子 15組 地域の高齢者
(5) 学習期間・学習時間（回数）	5月～10月 1回の学習時間 3時間×6回
(6) 学習場所	公民館他
(7) 学習目標	岡山を学び、地域の絆を作る

(8) プログラムの展開

回	学習テーマ	学習の内容及方法	学習支援者	備 考
5月	「投票箱を体験しよう」	・開票式、自己紹介 ・投票箱の役割、1票の大切さ ・練習→投票 ・振り返り	社会教育主事 ・公民館職員 ・自治体の人	会場：公民館 ※通員室、利用係員がサポートする利用者の利用を支援
6月	「伝統料理を『作ろう』」	・「おはようございます」 ・お茶の淹れ方 ・「いただきます」 ・地域料理上手な人へ学ぶ	社会教育主事 公民館職員 自治体の人 地域の人	会場：公民館 講師：地域の料理上手な人
7・8月	「伝統工芸品を『作ろう』」	<1回目>7月下旬 岡山県立大の工芸体験 ・紙の工芸体験 <2回目>8月中旬 前回の工芸体験を振り返り ・得意な工芸品を展示	社会教育主事 自治体 公民館職員	会場：岡山県立大 1回目は公民館 2回は公民館 参加費 1人 500円 必要用品は事前に提供 利用者の利用を支援
9月	「果物狩りに行こう！」	・ぶどう狩り ・品種：巨峰、巨峰、巨峰 ・収穫量 ・集合場所 活動しやすい公民館	社会教育主事 自治体	講師：岡山県立大 ボランティア 参加費 1人 150円
10月	「お礼のお茶会を『作ろう！』」	・お礼のお茶会の準備 ・お礼のお茶会の開催 ・お礼のお茶会の振り返り ・お礼のお茶会の振り返り	社会教育主事 自治体 公民館職員	会場：岡山県立大 1回目は公民館 2回は公民館 参加費 1人 300円

2013年7月10日（木）14:30～17:00 岡山県生涯学習センター
香川大学教育学部「生涯学習計画論A」

図2. 岡山県生涯学習センター（2013年度）

③堂々と、審査員とアイコンタクトを取りながら、発表することができていたか。

④声は聞き取りやすい大きさであったか。

⑤スライドは効果的に使えていたか。

発表の内容について（５項目）

⑥第３次計画で示された理念にそった内容であるか。

⑦計画を実行するにあたって、役立つ（効果的な）プログラムであるか。

⑧十分に実行可能なプログラムであるか。

⑨岡山県民の支持を得られるプログラムであるか。

⑩プログラムにはオリジナリティがあるか。

ここで岡山訪問後の学生レポート(2012年度、2013年度)を抜粋して紹介する。

- ・『第３次計画』を読み進めて、今まで何となく参加していた公民館の活動や地域での活動が、このような計画によって進められているのだと思うと、ただ楽しい活動というだけでなく、何のために、どういう目的で、どういった人が対象なのか、など、様々なことを気にするようになった。
- ・この授業を通し、私たち大学生は、そろそろ利用者の立場ではなく、企画する側の立場で物事を考えられるようになる必要があると強く感じた。また、常に新しく斬新なアイデアを提案できるよう、日頃から様々な分野に興味をもち、視野を広げておく必要もあると感じた。
- ・自分たちの考えはまだまだ甘く、もっと「実際に計画を実践する場合」を深く考えなければならなかったと感じた。確かにどのグループも、そのまま計画を実践した場合、それぞれ種類は異なるものの、スタッフの方々から指摘された面を中心に、様々なボロが出てくるだろう。当然のことかもしれないが、頭の中でシミュレーションをした時は上手くいっても実際は絶対にそう簡単にはいかないのだ。そのことを痛感させられた。今まで、「この部分をもっとこうしたらいいのに」とふと

思ったことは何回もあるが、計画を立案する側に立って初めてその難しさ、大変さが分かった気がする。

- ・オリジナル講座のプレゼンテーションでは、主催者側としてのツメの甘さや知識の乏しさ、難しさを感じつつも、社会教育の現場に立つ方からの貴重なコメントは非常に勉強になった。例えば、県内各地から集うことや天候、交通手段の考慮、講座のストーリー性、目的との一致、ネーミングセンスであり、さらに、講座内外の工夫（スタンプ、楽しみのある企画、予習復習を促す等）も重要な要素であることを学べた。
- ・企画書の前年度例を見て、度肝を抜かされた。なんとややこしい…。これをわたしたちがやるのですか、と。これ本気で職員さんながらじゃないですか、と。しかし確かに大学生相応の、世間知らずなゆるい企画を提案しただけでは、学校でほんやりと座学を受けるのと同じで、いつまでたっても実態をつかめないままである。なるほど、本気でやってやろうと意気込んだ。(中略) こういった企画を立案するという実の仕事に触れたからこそ、ニーズを把握しつつ適切な教育の場を提供する難しさというものを改めて感じた訪問であった。

岡山県生涯学習センター、徳島県立総合教育センターを訪問し、現職の社会教育主事と交流することは、学生に大きな刺激となっている。大学の教室では得られない経験であることは間違いない。ただし、15回の授業内容としては欲張りすぎの感が否めない。グループワークは授業時間内では終わらず、個人ワークも含めると宿題が大量となっている。盛り沢山すぎて消化不良に感じる点が今後の課題である。

Ⅳ. 学習プログラムの実施—社会教育課題研究Ⅱ—

「社会教育演習、社会教育実習又は社会教育課題研究のうち一以上の科目」（４単位）は、

専門的な知見をふまえた実践的な能力の向上、および学習者とのコミュニケーション能力の向上を図ることを目的とする科目である。社会教育審議会成人教育分科会「社会教育主事の養成について（報告）」（1986年）において、「実践的な能力の養成を図るため、できるだけ実習を行うように努めることが望ましい」と述べられたとおり、とりわけこの科目においては座学ではなく実習が求められている。

しかし、香川大学のカリキュラムは以下のとおり、科目の趣旨に沿った内容になっているとは言い難い。

- ・社会教育演習は、教育学演習ⅡA・ⅡB（学校教育教員養成課程学校教育基礎コース）、教育環境デザイン演習Ⅰ・Ⅱ（人間発達環境課程人間環境教育コース）、および教育法演習（隔年開講）をあてている。
- ・社会教育実習は、開講せず。
- ・社会教育課題研究は、Ⅰを隔年で、Ⅱを毎年開講している。

演習の詳細な内容は不明であるが、社会教育主事の実践的能力に焦点化した内容となっていないことは明らかである。社会教育主事に特化した内容で毎年開講しているのは、筆者担当の社会教育課題研究Ⅱだけという実情である。

筆者は、社会教育課題研究Ⅱを担当するにあたって、かつては「課題研究」の名のとおり、二番丁地区まちあるきガイド『二番丁ものっそWalk』の作成（2007～2008年度）、香川県社会教育史の作成（2009年度）、郷土学習教材となるご当地検定の作成（2010年度）など、毎年テーマ（課題）を決めて学生の主体的な学習を促すと同時に、学習成果を小冊子にまとめていた。この授業方法は「調べる」「書く」能力の育成という点では効果があったと思われるが、それは他の授業でも十分可能である。社会教育主事として最も重要なスキルの一つである学習プログラムの企画・実施を行いたい、社会教育実習のかわりになるような何か実習要素を含む授業に取り組みたい、と考えるようになった。

そこで2011年度からは「大学開放」をテーマとし、授業の最終ゴールとして小学生の夏休み期間中に受講生たちが講師となって講座を行うこととした。生涯学習計画論Aが学習プログラムの企画のみ、言わばシミュレーションで終わっているのに対し、社会教育課題研究Ⅱでは企画に加え実施までを含むものとして授業を構成したのである。

学生が行う講座は、2011年度は大学博物館のミュージアム・レクチャー、2012年度以降は生涯学習教育研究センターの公開セミナーとして位置づけ（いずれも受講料無料）、講座開設の諸費用（材料費、会場までの交通費、等）については博物館・センターが負担、受講申込の受付は原則として事務職員が担当している。

授業は冒頭3～4回で大学開放の概要に関する講義、香川大学や他大学で行われている大学開放事業の事例研究を行い、第5回目頃から具



図3. 公開セミナー（2013年度）

上：紫いもでおいし〜い科学実験！

下：みんなで飛ばそうフィルムロケット

体的な講座の企画・準備を行っている。2011年度（履修学生数2名）は「星座の物語～プラネタリウムを作ろう！～」⁴⁾、2012年度（同3名）は「みんなでドミノ倒し！」、2013年度（同10名）は「紫いもでおいし～い科学実験！」「みんなで飛ばそうフィルムロケット」の2講座を実施した。

ここで2013年度の実施内容をやや詳しく紹介しよう。本科目の履修人数は例年5名前後と少ないが、2013年度は過去数年に比べると多かったため、5名ずつの2グループに分け、高松市二番丁コミュニティセンターと三豊市市民交流センターの2つの会場で講座を行うこととした（会場の選定についてのみ、筆者が交渉に当たった）。講座の概要は表3のとおりである。

講座内容は大学生のアイデアで自由に決めている。2013年度に実施した講座は、2グループとも、あるメンバーがかつて小学生のときに経験して強く印象に残っている講座をやりたい、ということで決まった。ただし講座を受けてからは相当の年数が経っているため記憶に曖昧な部分があったり、あるいはより良い方法があるのではないかと調べたり、具体的な内容・進め方を確定させるまでには何度も試作品づくりを繰り返した。

講座を実施するためには、当日120分間頑張れば良いというものではない。広報期間のことを考えると、遅くとも1ヶ月半前までにはある程度の内容を決めなければならない。子ども（あるいは保護者）が興味を惹くようなタイトル、チラシのデザインも考えなければならない

い。講座に必要な物品は大学の事務を通して購入するが、モノによっては納入までに時間がかかるため、早めに発注しなければならない。5名ずつ2グループに分かれたが、「紫いもでおいし～い科学実験！」の担当者5名は、「みんなで飛ばそうフィルムロケット」の時はサポートをすることとなる（逆も同様）。別グループのメンバー5名に当日適切に動いてもらうために、事前にお互いの講座内容をしっかり把握しておいてもらわなければならない（なお、2011～2012年度は履修学生が少なかったため、当日協力学生を募り、事前研修を行った。そのためマニュアル作成も事前準備に含まれた）。

しかし、大学生にとっては自分たちで講座を企画・実施することは初めての経験である。講座企画に先立ち、事前準備から当日までの流れを一通り説明するのだが⁵⁾、当日までに具体的に何をすれば良いか、どのようなスケジュールで動けば良いか、全く分かっていない。筆者がタイミングを見てアドバイスをするものの、大学生の動きは鈍く、叱責もしばしばであった。

幸いにして両講座とも定員を上回る申込があり、数名ずつ増やして受け入れることにしたものの、主に会場キャパシティの関係で何人かはお断りしなければならなかった。そして、当日楽しく参加している子供たちの様子に触れ、本番までの様々な苦労が報われたと感じた学生は多かったようである。

授業終了後の大学生のレポートには以下のような「振り返り」が述べられている。

表3. 2013年度公開セミナー概要

タイトル	紫いもでおいし～い科学実験！	みんなで飛ばそうフィルムロケット
日時	平成25（2013）年7月24日（水）13:30～15:30	平成25（2013）年7月31日（水）13:30～15:30
対象	小学校4～6年生、16名	小学校1～6年生、20名
会場	高松市二番丁コミュニティセンター 調理室	三豊市市民交流センター ホール
内容	紫いもに含まれるアントシアニンは、酸性やアルカリ性になると色が変わる性質を持つ。通常の蒸しケーキを作る材料だけではアルカリ性となるため、カビが生えたような色の蒸しケーキとなってしまう。どうすればきれいな紫色になるか、中和の原理を学ぶ。最後に紫いもの蒸しケーキを作って、全員で食べる。	〔低学年〕フィルムケースでロケットを作り、発砲入浴剤を使って飛ばす。 〔高学年〕フィルムケースでロケットを作り、気化エタノール＋電気（圧電素子により発生）によって起こる爆発力を用いて飛ばす。
広報	大学ホームページ チラシ（香川大学教育学部の近隣小学校へ直接持参）	三豊市広報 チラシ（三豊市教育委員会を通じて市内全小学校へ配布）

- ・率直な感想としては大変だったという気持ち
が大きい。企画する段階でなかなか良い案が
浮かばず、試行錯誤を重ねた上で紫いもの粉
を使った科学実験というテーマを決定した
が、そこからの計画や当日の段取りを決めて
いくのは特に難しかった。
- ・今まで誰かが企画したものに手伝いとして協
力したり参加したりしたことは何回かあった
が、実際に一から計画を練っていくことはほ
とんど初めてで、自分たちが主体となって進
めるためには非常に多くのことを考えなけれ
ばならないということを学習した。
- ・講座終了後に子どもたちから「楽しかった」
と言われたことは非常に嬉しく、自信を持っ
て成功したと言えるのではないと思う。

反省点もある。今回、グループ内に他者依存
的な学生を生じさせてしまったのであるが、5
人というグループ人数だとそのような危険性
があるという⁶⁾。このようなプロジェクト型の授
業を行う場合、グループの人数や編成には十分
な配慮が必要である。「本物」の講座を実施す
る以上、失敗はできるだけ最小限に抑えたい。
個々の学生のパフォーマンスを最大化できるよ
う、細心の注意を払う必要がある。

V. 学習プログラムの調査、コミュニケーション能力の育成—社会教育特講ⅡA—

「社会教育特講」(12単位)は、社会教育主事
としての幅広い視野、社会的関心を持たせると
ともに、専門的内容についての理解を図ることを
目的とする科目である。Ⅰ～Ⅲに区分されて
おり、Ⅰは現代社会と社会教育、Ⅱは社会教育
活動・事業・施設、Ⅲがその他必要な科目とさ
れている。社会教育審議会成人教育分科会「社
会教育主事の養成について(報告)」(1986年)
では、社会教育特講の留意点として「社会教育
活動に関する体験(実習)をできるだけ持たせ
るため、社会教育施設や民間の学習関連機関を
個別に実地調査し、あるいはボランティアとし
て地域活動に参加すること等を積極的にすす

め」ることが挙げられている。社会教育演習等
と同じく、座学にとどまらず実習も求められて
いるのである。

筆者は香川大学に着任した2004年度から継
続して「社会教育特講ⅡA」を担当している
が、当初3年は、現場で働く人と直接触れる機
会を持ち「生涯学習の現場で働く」とはどうい
うことなのか学ぶため、「社会教育施設等にお
いて学習機会提供に関わる人(1名以上)に
会ってインタビューし、報告すること」という
課題を出していた。学習成果は年度毎にインタ
ビュー・レポート集としてまとめ、お礼を兼ね
てインタビューへお渡しするとともに、次年
度の受講生にも参考資料として渡した。学生は
インタビュー・次年度受講生に「読まれる」
ことを意識せざるを得ない状況であった。

これらの時間をかけて行ったインタビュー成
果の中には、おそらく一般の方々も知らないで
あろう意外な情報、あるいは隠れた苦労など、
興味深いものが含まれていた。生涯学習はすべ
ての人々に関係ある事柄である。地域住民に
とって有益な(少なくとも興味深い)情報をより
広くアピールすることはできないだろうか、
学生の情報発信力を高めつつ地域貢献になるよ
うな取組ができないかと考え、2007年度からは
最終成果を印刷物ではなく、電波にのせて声で
発信することとした。前年に本学の「地域連
携型キャリア支援センターの新機軸」(2006-
2008年度)が現代GPに採択され、本授業に対
してキャリア教育推進経費が措置されたこと、
また、FM高松に企画書を持参したところ全
面的な協力を得られたことも後押しとなった。

社会教育特講ⅡAにおいて、インタビュー成
果に基づきラジオ番組を制作するという取組の
ねらいをまとめると、以下の6点である。

- ①「現場を知る」現場を訪れ、直接お話を伺う
ことで「生涯学習の場で働く」とはどうい
うことなのかを知ること。
- ②「物事を深く探求する」インタビューによっ
て、まだ世間に知られていないこと、意図的
に隠されていること、あるいは暗黙知として

伝えられていることなど、必ずしも文書として明らかにされていない「書かれていないこと」を読み取る力をつけること。

- ③ [コミュニケーション能力] 取材申込から実際のインタビューに至るまで、学生みずから学外者とやりとりすることが、コミュニケーションの訓練になること。
- ④ [メディア・リテラシー] 自ら番組を制作することでメディアが「構成されたもの」であることを体験的に理解すること、そして情報を批判的に読み取ることの大切さを知ること、さらには聴く側にとどまらず作る側となりうるように発信力を高めること。
- ⑤ [本物体験] シミュレーションではなく実際に放送される番組を作ることで、学生の本気を引き出すこと。
- ⑥ [地域貢献] 本取組が各社会教育施設の広報となり、学生の地域貢献となること。

上記①と⑥こそは「社会教育主事」という資格を強く意識したものであるが、②～⑤は資格取得に拘らず様々な学生にとって意味のあることである。実態として、卒業後にいずれ社会教

育主事として任用されうる自治体に就職する受講生は少数である。彼らが将来いかなる進路を取ることになるにせよ、ここでの体験は社会人として必要な能力⁷⁾を育成する上で役に立つことは間違いない。

限られた資源である電波を用いるラジオは、総務省の許認可事業であり、放送法や電波法の制約の下、国から免許を与えられた事業者によって展開されている。責任を持って人に何かを伝えるためには、伝える物事についての深い理解が必要である。番組を「聴くに値する内容」にするためには、まずは伝え手が真摯に学ばなければならない。

さて、2007年度から2013年度までに制作した番組は、表4のとおり、計24番組（720分）である。番組タイトルとオープニング曲については、取り組みの継続性を考慮し、2007年度に決定した「わくわく！高松」と、GTS feat. MELODIE SEXTON の“Do You Wanna Get Serious”を使用している。

番組制作は各自で作成した企画書を授業中に練り上げることから始まる。その後、取材先に赴きインタビューを行い、シナリオ（原稿）

表4. 「わくわく！高松」放送一覧

年度	学生数	テーマ	放送日時	取材先
2007年度	5名	(社会教育施設)	2008年2月28日(木) 2008年3月6日(木) 両日とも19:30～20:00	高松市男女共同参画センター、アイバル香川、高松市美術館、香川県教育委員会保健体育課(香川県立体育館)、香川県赤十字血液センター
2008年度	13名	(社会教育施設)	2009年2月26～27日(木金) 2009年3月5～6日(木金) いずれも19:30～20:00	香川大学(博物館、検定、公開講座)、高松市中央図書館、高松市レクリエーション協会(遊びの城)、コミュニティセンター(二番丁、四番丁、栗林)
2010年度	9名	コミュニティ活動(1)	2011年3月7～11日(月～金) 毎日12:00～12:30	コミュニティセンター(多肥、屋島、塩江、栗林、古高松、男木、二番丁、香西、川東)
2011年度	6名	生涯スポーツ	2012年2月27～29日(月～水) 毎日12:00～12:30	高松市スポーツ少年団、総合型地域スポーツクラブ(教育学部野崎教授)、コナミスポーツクラブ高松、社会人ソフトバレーボールチーム「木鶏」、亀岡テニスクラブ、高松市スポーツ振興課
2012年度	8名	子育て支援	2013年2月25日～3月1日(月～金) 毎日13:00～13:30	高松市子育て支援課、子育て集会所“夢てらす”、たかまつファミリー・サポート・センター、コミュニティセンター(二番丁、川添)、高松市中央図書館、高松本とおはなしの部屋、下笠居おやじの会、香川県教育委員会生涯学習・文化財課
2013年度	9名	コミュニティ活動(2)	2014年2月24～28日(月～金) 毎日13:00～13:30	コミュニティセンター(亀阜、二番丁、女木、下笠居、太田中央、花園、古高松南、三谷、栗林)

注) 2009年度はFM高松の都合により番組制作はしなかった。

を作る。収録はFM高松のスタジオで行う。2人一組のグループを作り、30分番組を前半後半に分け、前半は学生Aが話し手となり、聞き手役の学生Bに向かって自分が取材して知れたことを話し、後半は反対に学生Aが聞き手、学生Bが話し手となる、という形式が基本である(筆者はミキサーを担当している)。

2007-2008年度は学生が関心を持った施設に取材に行っており、「社会教育施設」という大枠はあるもののストーリーとして統一感に欠けるくらいがあった。2010年度からは番組全体にかかる「今年のテーマ」を学生との話し合いによって決定し、そのテーマに基づいて取材先を選定することとした。これまでのテーマは、2010年度がコミュニティ活動(1回目)、2011年度生涯スポーツ、2012年度子育て支援、そして2013年度がコミュニティ活動(2回目)である。

収録に先立ち、「人前で話す」訓練もしている。

- ①発声および滑舌練習:北原白秋「五十音」(初級)、落語の「寿限無」(中級)、歌舞伎「外郎売」(上級)を題材としている⁸⁾。
- ②収録体験:学内に揃えた収録機材一式⁹⁾を用いて、身の回りのことを話題とするトークを録音し、聞き直して自分の話し方の癖を知る(語尾がはっきりしない、早口になる、等)。
- ③言葉だけで伝える練習:ラジオ番組には映像がない。自分は「見て」「聞いて」「体験して」よく知っている事象を、映像に頼らず、言葉(音声)だけで伝えることができるかどうか。



図4. FM高松における収録(2013年度)

自分だけが見ている絵(イラスト、写真、等)を、言葉だけで伝える練習をする。

- ④本番体験:筆者がパーソナリティをつとめるFM高松の番組にゲスト出演し、大学生活や将来の夢などを語る。自分は緊張するタイプなのかどうか、緊張すると普段と話し方がどのようにかわるのか事前体験する。

課題はインタビューとの距離の取り方である。取材は学生が個人で出向くが、歓待していただくことが多い。学生は取材先に大いに感謝し(それ自体は人としてあるべき感情であるが)、インタビューから聞いた話を「素晴らしい取組である」として無批判に賛辞を送る。

もちろん、その評価に相応しい取組もあるだろう。しかし「自画自賛」であるかもしれない。批判的な視点、「一步引いた」視点を持つことは極めて難しい。インタビューとの距離を保って批判的な視点で伝えるには、わずか1回だけの取材では不十分であり、相当な知識の積み重ねがなければならないことは言うまでもない。学生にそこまで期待するのは酷というものであろう。ただし、インタビューの話した内容をそのまま伝えるだけでは、収録時にインタビューをスタジオに呼んで話をしてもらえば済むことである。学生には、インタビューの代弁者となりつつも、第三者として自らの意見を述べるよう指導するのだが、差し障りのない優等生発言に終始している感が否めない。

取材先の選定は教員の人脈には頼らず学生に任せているが、近年、取材先の重複が生じてしまっている。「生涯学習」という概念は幅広い。新しい取材先を開拓し、メディアのプロが取り上げないような、大学生の視点をいかした番組制作を行うことが今後の目標である¹⁰⁾。

VI. 成果と課題

ここまで、社会教育主事コースの筆者担当4科目(生涯学習概論Ⅱ、生涯学習計画論A、社会教育課題研究Ⅱ、社会教育特講ⅡA)における地域と連携した実践力育成の取組について紹

介してきた。個々の科目の成果・課題はそれぞれの章で触れてきたが、ここで全体にかかる成果と課題についてまとめておこう。

成果は学生による授業評価の高さである。実践力育成という「到達目標の達成に向けた授業」であるかという点についての学生評価は、直近の2013年度を例に取ると、生涯学習概論Ⅱが4.41（種別平均4.02，括弧内以下同様），生涯学習計画論Aが4.47（4.00），社会教育課題研究Ⅱが4.70（4.23），社会教育特講ⅡAが4.75（4.19）であり，種別平均を上回っている（最高点は5点。以下同様）。特に実践の内容をより多く含む社会教育課題研究Ⅱと社会教育特講ⅡAの評価が高い。同様に「到達目標の達成度と満足度」についても，生涯学習概論Ⅱが4.34（4.00），生涯学習計画論Aが4.53（3.97），社会教育課題研究Ⅱが4.60（4.24），社会教育特講ⅡAが4.44（4.20）と，いずれも種別平均を上回る。学生による授業評価の高さが客観的に見て学生の実践力育成に結び付いているかどうかまでは断言できないものの，各章に引用した学生レポートは，実践力とは何かを学生が理解したことを伺わせる内容となっている。

課題は資金面である。学外施設への見学等には少なからず費用がかかる。生涯学習計画論Aは地域社会連携型フィールドワーク科目拡充支援事業の経費的支援を受けているからこそ可能な内容である。同経費は学部への配分ではなく教員個人への配分となっているため，筆者のような教育学部教員ではない者（学内非常勤）にとっては大変な難い。同経費の継続を強く望むところである。また，社会教育特講ⅡAは，2007年度に現代GPの支援を受けていたもののその後は経費面でのバックアップはないため，電波使用料は筆者の負担，取材にかかる経費は学生の自己負担である。遠方への取材や複数回にわたる取材が難しい現状である。

生涯学習概論Ⅱや社会教育課題研究Ⅱのように，県教委生涯学習・文化財課や生涯学習教育研究センターの主催事業と連携する場合は心配不要であるが，すべての科目で主催事業と連携できるとは限らない。社会教育主事としての実

践力育成のためには社会教育の現場を知ることが必要である以上，学外活動を含む授業に対する経費的措置が望まれる。

おわりに

社会教育主事に限らないが，実践力はプレッシャーのかかる「本物体験」を積み重ねることではしか得られないのではないかと感じている。

本稿の事例を再度ここで取り上げるが，社会教育課題研究Ⅱで小学生対象の講座を行うとき，保護者が会場の周囲で見ていることが多い。「これから何がはじまるのだろうか」という期待を込めた視線を一身に浴びる，これが学生にとっては大きなプレッシャーであるという。社会教育特講ⅡAでラジオ番組を収録する際も同様である。FM高松は高松市中心部の常盤町商店街（トキワ街）の中にあり，ガラス張りのスタジオは通行人から丸見えである。人から見られる中での収録は相当な緊張を伴う。インタビューーも「どのような番組になるのだろうか」と楽しみに待っている。このようなプレッシャーに打ち勝って良いもの（講座，番組）を作るためには真剣に取り組まなければならない。実践力を身につけるには，何よりもこの「真剣さ」が必要であると思われる。

最後に，実践力を養うための「本物体験」をさせて頂く現場である社会教育施設等との関係についても一言述べておきたい。見学や実習において社会教育施設等に学生を受け入れて頂く際，現場に一方的に負担を押し付けるようでは継続的に良好な関係は保てない。大学側，施設側，双方がWin-Winの関係になること。施設側にとって大学生を受け入れることが，新たな講座の提供につながる，広報に役立つなど，活性化につながることを望ましい。そのような関係ができてこそ，真の地域連携と言えるであろう¹¹⁾。

謝辞

本稿執筆のきっかけは2013年12月18日の教育学部FDにて筆者の授業を紹介する機会を与え

て頂いたことです。また、授業実施にあたっては多くの方のご協力をいただきました。香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課、岡山県生涯学習センター振興課、徳島県立総合教育センター生涯学習課、FM高松コミュニティ放送株式会社および番組制作にあたってインタビューに快く応じてくださった香川県内市町教育委員会および社会教育施設等の皆様、そして授業を履習した大学生に感謝申し上げます。

註

- 1) 香川正弘・鈴木眞理・佐々木英和編『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房、2008年／鈴木眞理・永井健夫・梨本雄太郎編著『生涯学習の基礎[新版]』学文社、2011年。
- 2) 「第4回コカ・コーラさわやか杯さぬKidsかるた大会」開催要項より抜粋。
- 3) 鈴木眞理・山本珠美・熊谷愼之輔編著『社会教育計画の基礎[新版]』学文社、2012年。
- 4) 「星座の物語～プラネタリウムを作ろう!～」などのミュージアム・レクチャーについては、詳細な別稿を執筆している(山本2012)。
- 5) 社団法人全国公民館連合会『みんなに内緒にしておきたい講座づくりのノウハウ』2011年を参考にしている。
- 6) 2014年5月13日開催の学内FDにおける、Teamology理論に関する工学部荒川雅生教授の指摘では、3～4人が適切な人数とのことである。
- 7) 社会人として必要な能力とは、例えば、経済産業省「社会人基礎力」で示された前に踏み出す力(主体性、働きかけ力、実行力)、考え抜く力(課題発見力、計画力、創造力)、チームで働く力(発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ストレスコントロール力)をあげることができよう。番組制作にあたってはこの中のどれかということではなく全ての能力が総合的に必要とされる。
- 8) 発声および滑舌練習の題材は、テレビ朝日アナウンス部『アナウンサーの話し方教室』(角川書店、2003年)、塩原愼二郎『アナウンサーの日本語講座』(創拓社出版、2003年)などを参考に選定している。
- 9) 揃えた機材は、ミキサー(YAMAHA MW12CX)1台、マイク(SHURE PG58)・マイクスタンド・ウィンドスクリーン5セット、ヘッドフォン1個。ノートパソコンとCDラジカセ、スピーカーは既存の備品を活用。収録・編集ソフトはFM高松と同じくSound It!を使用。必要な時教室に持参し、その都度セッティングしている。
- 10) 社会教育特講ⅡAの取り組みについては、より詳細な別稿を執筆している(山本2008、山本・藤本2014)。
- 11) 付言すると、基本的なことであるが、教員・学生側のマナー、職員側のマナー、双方が必要であることは言うまでもない。

文 献

- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『社会教育主事の教育的実践力に関する調査研究』2002年3月。
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『社会教育主事の職務等に関する実態調査報告書』2006年4月。
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『社会教育主事の専門性を高めるための研修プログラムの開発に関する調査研究報告書』2009年3月。
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター『社会教育計画策定ハンドブック(計画と評価の実際)』2012年3月。
- 山本珠美「香川大学教育学部生によるラジオ番組制作～文部科学省現代GP「実践的総合キャリア教育の推進」の取組として～」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第13号、2008年、pp.53-72。
- 山本珠美「学生主体の地域貢献～香川大学博物館におけるミュージアム・レクチャーの取組～」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第17号、2012年、pp.31-46。
- 山本珠美・藤本佳奈「香川大学生によるラジオ番組制作(Ⅱ)～正課・正課外教育におけるFM高松コミュニティ放送との連携～」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第19号、2014年、pp.63-82。